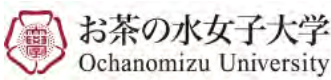


第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム

参加報告書

実施期間:2016年12月6日～8日

実施場所:大韓民国梨花女子大学校キャンパス



English

簡体字

繁体字

한국어

お問い合わせ

非常時の対応

検索

トップページ > 理学部 > 2016年 > 第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

メニュー

文部科学省主催第6回「サイエンス・インカレ」開催についてのご案内

第4回宇宙講演会「子どもから大人まで宇宙に夢中！」

国立大学法人理学部長会議声明 ー未来への投資ー

進路・就職状況を更新しました

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

湯浅年子記念奨学金特別研究員候補者の平成28年度募集締切を6月15日（水）に延長しました

湯浅年子記念奨学金特別研究員候補者の平成28年度募集（平成28年6月1日締切）のご案内

平成28年度「第4回湯浅年子賞」募集のご案内（平成28年7月29日締切）

平成28年度「第2回黒田チカ賞」募集のご案内（平成28年7月29日締切）

平成27年度理数学生応援プロジェクト後継事業の顕彰式を開催

学部オープンキャンパス2016（理学部：平成28年7月16日開催）のご案内

平成29年度理学部第3年次編入学説明会を4月16日に開催します

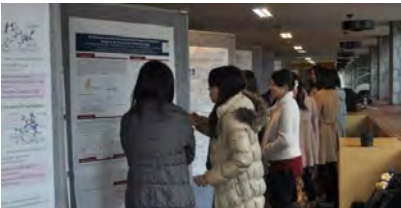
アカリクイベント：理工系女子学生のためのキャリアセミナー（平成28年2月23日開催）のご案内

平成27年度 お茶の水女子大学賞（湯浅年子賞、黒田チカ賞）授賞式（平成28年1月20日開催）のご案内

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

2016年12月12日更新

2016年12月6日から8日まで、韓国の梨花女子大学校において、梨花女子大学校と日本女子大学および大学の理系学生の交流を目的とした第7回「日韓3女子大学交流合同シンポジウム」が開催されました。本学からは、文部科学省特別経費（国立大学機能強化分）「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」事業の支援を受けて、13名の大学院学生と3名の学部学生、4名の教員が参加しました。シンポジウムでは、各大学から参加した学生が研究内容や研究成果について、英語で口頭とポスターで発表するとともに、各大学の教員代表から4件の特別講演がありました。本学からの世話人として、第1回から引き続き参加している生物学科由良敬教授に今回のシンポジウムの様子について報告してもらいました。



由良教授の報告

由良 敬
お茶の水女子大学 基幹研究院 自然科学系教授（理学部生物学科）
生命情報学教育研究センター センター長

理系学生の英語による研究発表能力の鍛錬、海外での研究会参加の訓練、および日韓女子大学の友好関係構築を目的として、6年前から日本女子大学、梨花女子大学、および大学の理系学生（学部生および大学院生）が、合同で研究発表会をおこなってきている。第7回目の本年度は、12月6日～8日の3日間、本学からは学部生3名と大学院生13名、教員4名の総計20名で韓国梨花女子大学を訪れた。海外にはじめて渡航する学生もいるにもかかわらず、過去6回の開催経験のおかげで、全体として何の問題もなくシンポジウムを開催することができた。梨花女子大の準備に対するご努力には、いつもながら敬服する。

数年前から行うようになった教員による基調講演により初日が始まり、その後に学生交流会、2日目は数学・統計学、物理学、化学、生命科学・薬学の4つのセッションにわかれた口頭発表、3日目は参加者全員によるポスターセッションがおこなわれた。学生主催の学生交流セッションは、例年同様うまくいったらしく、シンポジウム期間を通して、日韓の学生の交流を随所で見ることができた。第2日目の発表においては、韓国側からの発表が少なかったことが残念であった。ちょうど学年度末の試験などと日程が接近してしまったために、どうしても参加できない学生および教員がいた様です。来年度以降の開催日程には配慮が必要であることがわかった。それでも発表した韓国側の学生は、流ちょうな英語で研究内容を次々と発表し、日本側はやや圧倒されるところがあったかもしれない。日本側の教員としては、学生の指導にがんばらねばと思った次第である。しかし今回は、日本側の学生が口頭発表に対して積極的に質問をし、各自の口頭発表に対する梨花女子大教員からの質問に対しても、何とか回答しようと努力していたことは、大きな収穫であった。口頭発表に対する学生からの質問がほと

平成28年度「第1回保井コノ賞」募集のご案内（平成28年12月1日締切）



んどないことが、例年問題点としてあげられていただけに、今回のシンポジウムでは、明るい未来が見えたと思っている。第3日目のポスター発表では、日韓の学生および教員が各自のポスターの前で、討論している様子があちらこちらで見受けられたのもよかった。このような議論を通して、学生間や教員間の交流が深まっていくことが期待できよう。このシンポジウムから、ぜひとも日韓の共同研究が生まれてほしいと感じる。

今回のシンポジウムでは、発表者の士気を高めることを目的に、梨花女子大側の提案で、ベスト発表賞を導入した。このおかげもあって、口頭発表の質があがったとも考えられる。参加教員による厳選な審査と審議にもとづき、梨花女子大から4名、日本女子大から3名、本学からは、稲垣志帆、川崎波留、中川真理子の3名が受賞した。今後もシンポジウムの活性化をいろいろと試みていきたい次第である。

本シンポジウムは、学生間の交流と各自の研究を英語で他分野の研究者に紹介することを目標としてきた。日本女子大および本学の学生諸君は、10月から行っていた発表練習の甲斐もあり、口頭発表での質疑応答ができるようになったのは大きな収穫であった。学生諸君を韓国まで引率した意義は十分にあったと感じている。学生諸君にとっては、ソウルでの見聞と梨花女子大生との交流が、日韓の歴史や韓国の科学力を肌で感じるよい機会になったことは間違いなく、自身の現在と未来を考えるよい材料になってくれたと思う。このような機会を若いうちにもつことは、非常に重要なことであろう。本活動は、来年度以降もぜひとも継続していきたい次第である。

ツイート

いいね！ 0

ブックマーク 0

G+1 0

ページトップへ戻る

- 電力使用状況
- プライバシーポリシー
- 教職員メニュー
- アクセスマップ
- このサイトについて
- サイトマップ
- ソーシャルメディアポリシー
- お問い合わせ
- 個人情報について
- 情報セキュリティポリシー

国立大学法人お茶の水女子大学
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
責任者：
E-mail：



PC表示

スマホ表示

Copyright © OCHANOMIZU UNIVERSITY. All rights reserved.

参加学生名簿

氏名	所属	学年	研究室
榎吉奏子	理・数学	D1	塚田研
下華奈子	理・物理科学	M2	曹研
山田未佑	理・化学・生物化学	M2	相川研
杉井昭子	ライフ・生命科学	M2	加藤研
中條佑美	ライフ・生命科学	M2	近藤研
輿石めぐみ	理・物理科学	M1	森川研
川崎波留	理・化学・生物化学	M1	棚谷研
楠本美侑	理・化学・生物化学	M1	鷹野研
重永皐月	理・化学・生物化学	M1	矢島研
中村早希	理・化学・生物化学	M1	矢島研
宮川瞳	理・化学・生物化学	M1	相川研
山中聡美	理・化学・生物化学	M1	鷹野研
田端千夏	ライフ・生命科学	M1	小林研
青木郁子	理・生物学	B4	近藤研
稲垣志帆	理・情報科学	B4	郡研
中川真理子	理・情報科学	B4	由良研

シンポジウム参加学生報告書
左記名簿順に掲載

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 榎吉 奏子

所 属(Affiliation): 理学専攻数学領域 (指導教員(supervisor): 塚田 和美)

発 表(Presentation): Totally Complex Submanifolds of Associative Grassmannian Manifolds

私は2016年6月21日から7月8日までの約3週間、今回のシンポジウムと同じく梨花女子大学において開催された、第2回梨花女子大学-ルース国際セミナーに参加した。その時は、自分の研究についてではなく、「科学史における目指すべき女性」というテーマに基づいて発表をしたので、今度は自分の研究内容について英語で発表する機会を持ちたいと考え、今回のシンポジウムの参加を決めた。

シンポジウムは数学、物理、化学、ライフサイエンスの4つのセッションに別れており、私が参加した数学セッションでは、日本女子大学の学生4人が位相幾何学について、梨花女子大学の学生4人が統計学について、お茶の水女子大学からは私が微分幾何学についての研究発表を行った。韓国側は応用数学、日本側は純粋数学というように内容がきっちり分かれていた。日本女子大学の学生4人の発表は、通常の数学の発表をするときと同様に、必要な概念や言葉の定義に始まり、主結果の定理の主張についての説明をし、最後に証明の概略について述べる、という形式だった。そのため、研究の詳細を大まかに知ることができた。一方の私は、純粋数学についてあまり詳しくない聴衆に向けて、純粋数学の面白さを伝えられるようにと思って発表内容を構成していたため、厳密さを欠いていた。聴衆全員が純粋数学の専門家だったあの場においては、より立ち入った内容を話すべきだったと思う。しかし、専門外の人にも内容が伝わるような発表をすることに力点を置いて練習をしたことは、抽象的な数学の考え方を平易な言葉で説明する良い訓練になり、私の頭の中も整理されて良かった。リハーサルでは、言葉に詰まって流れが途切れてしまうことがあったのだが、本番では落ち着いて自然な姿勢でスムーズに話せたので、その点においても成長できたように思う。

このシンポジウムのことは、学部や修士課程に在籍していた頃から知っていたのだが、数学科の学生の場合、学部や修士の段階ではまだ研究結果を得られていないことが多く、私の周りでは誰も応募しようとする人はいなかった。しかし、今回参加してみて、日本女子大学の学生は、現在読んでいる論文の内容を自分なりにまとめて発表していることがわかった。たとえ、自分の研究結果ではないとしても、勉強していることを13分の発表という形にして、他の学生の前で説明することによって、よりよくその内容を理解できるので、とても良い経験になるのではないかと思った。数学科の学生は、他の学科の学生に比べて発表する場を持つことは少ないので、私ももう少し早いうちにこのシンポジウムに参加して経験を積んでおいても良かったのかもしれないと感じた。

翌日のポスター発表において、日本女子大学の学生と口頭発表の時に理解できなかったことを互いに説明しあった。その学生は、数学セッションのベスト発表者賞をとった方だったのだが、理路整然と自らの研究内容をたのしそうに説明する姿に大いに刺激を受けた。説明も大変わかりやすかったので、研究内容に興味を持つこともできた。近いうちに日本女子大学の研究室を訪問し、さらなるディスカッションをする機会を持ちたいと思う。今回は残念ながら、梨花女子大学の学生と話すことはできなかったのだが、日本の他大学の数学を専攻する女子大学院生との交流によって、私も純粋な気持ちを持って真理を追求し続けたいと改めて思うことができた。

3日目の午後の自由時間に、今年6月に参加した梨花女子大ルース国際セミナーでできた友達のうち3人と再会した。3週間寝食を共にしたため、異なる国籍であっても気心が知れた仲となっていたので、この再会は本当に嬉しかった。まずは、3人のうちの1人が、観光客で賑わう繁華街の明洞にある、韓国人の間でも有名な「明洞餃子」に連れて行ってくれた。カルグッスという日本でいうきし麺を頼んだのだが、それと共に真っ赤なキムチが出てき

た。周囲の韓国人たちはひょいひょいつまんで食べていて、お代わりをする人も多くいた。私も彼らを見習って試そうとしたところ友達が、このキムチはキムチの中でも辛い部類のものだよと教えてくれたので、ほんの少しだけつまんでみた。その途端、汗が吹き出た。それは私が今まで食べてきたものの中で最も辛いものと言っても過言ではないくらい辛く、一気に水を5杯も飲んでしまった。



向かい側に座る友達は涼しい顔をして、ちょっと辛いかもと言うので、やはり韓国人の辛さに対する味覚は日本人のそれとは全く異なるのだと改めて思った。カルグッスは日本人も好む味で、とても美味しかった。その後梨花女子大学に戻り、2人と合流し近場のカフェへ行った。お互いの近況報告や卒業後の職業について一通り話した後、国際セミナー終了後に次々と不祥事が明らかになっていった韓国大統領についての、現地の人々の考え方や、彼女たちの自国に対する思いを聞いたことは大きな収穫だったと思う。私は韓国では連日のようにデモが行われていたのかと思っていたが、大規模なデモは土日だけで、平日の街中はいたって普通だった。また、10代や20代の人々の支持率が数パーセントであることが信じ難かったのだが、それは本当で、彼女たちはむしろ一体誰があの人を支持しているのかと不思議がっていた。日本の報道だけではピンと来ないことも、現地の雰囲気や現地の人の話を聞くと、よりよくその事態を把握できると感じた。一歩立ち入ったことも話せる国外の仲間をもて、国際セミナーに参加した意義はとても大きかったことにも改めて知ることができた。これからも彼女たちとは折に触れて連絡をして、交流を続けていきたい。また、米国や台湾にいる仲間とも再び会う機会を持てればと思う。

この3日間では、移動中や食事の時間に他の学科の先生方や学生とたくさん話すことができ、数学だけでなく他の分野の研究に対しても興味の幅を広げられた。今後の研究生生活においても、今回の経験を一つの糧として自らの研究内容を深く掘り下げていくと共に、常に好奇心を持ち続けて、周囲の科学に対しても関心を払っていきたい。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

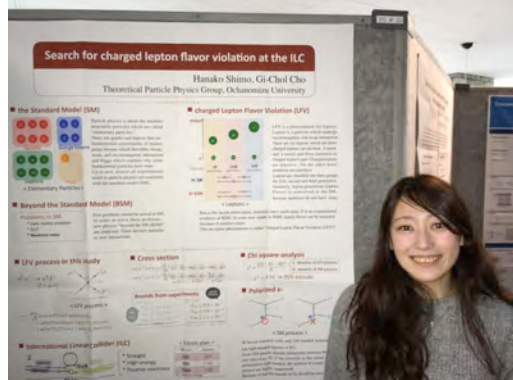
参加者名(Name): 下 華奈子

所 属(Affiliation): 理学専攻物理科学コース (指導教員(supervisor): 曹 基哲)

発 表(Presentation): Search for charged lepton flavor violation at the ILC

私はプレゼンテーション能力を向上させたい、また外国人に通じる英語を習得したいと思い、この日韓 3 女子大学交流合同シンポジウムに参加することを決めました。英語でのプレゼンテーションは初めてだったので、このシンポジウムを通して、たくさんのことを学びました。

シンポジウム前まで受講していた授業は、英語で短いプレゼンテーションを行い、由良先生が事細かにアドバイスをくださるという内容でした。専門単語や難しい単語の発音だけではなく、ほとんどすべての英語の発音を訂正してくださり、自分の英語の発音を見直す良い機会となりました。また発音や言い回しだけではなく、プレゼンテーションの構成やスライドの配色なども丁寧に指導してくださり、改めてプレゼンテーションの作り方を学ぶことができました。



シンポジウム直前に行われた学内リハーサルでは、本番と同じように時間を測ってプレゼンテーションを行いました。他分野の方にも分かるようにプレゼンテーションを作るのはとても難しく、リハーサルを聞いていた研究室の指導教員にも「他分野の人には分かりにくい話し方だったから、少し説明の仕方を直した方がいいかもね」というフィードバックをもらいました。しかし、自分の中では完成させたプレゼンテーションだったので、どのように直せばいいか分かりませんでした。その後、同じセッションだったメンバーの 1 人が、「この前のリハーサルで分からなかったことがあるのですが…」と質問をしてくれました。具体的な目的やグラフの意味が正確に伝えられていなかったようです。こうやって質問をしてくれたことで、他分野の人に「どのように伝わっているか」「どこで誤解が生まれやすいか」を知ることができ、本番に活かしました。発表までの質問や議論の重要性を身にしみて感じることができました。

英語でのオーラル発表は経験したことがあり、また授業やリハーサルでたくさん練習していたこともあり、当日もオーラル発表はそこまで緊張することなく行えたと思います。その反面、ポスター発表は日本語でも行ったことがなく、どのように発表すればいいか当日になっても分かりませんでした。発表に慣れていて、英語も流暢な学生のポスター発表を聞くことで、上手なポスター発表方法を現場で学ぶことができました。当日は、上手くポスターの説明をすることができなかったのですが、コツは掴めたので次の機会にむけて練習をしたいと思います。またポスターセッションでは発表に時間制限が無いので、たくさん質問しながらゆっくり理解することができ、他分野の研究でも聞くことが辛くありませんでした。今までは「分野が違うから分からなくてもしょうがない」という気持ちで発表を聞いていたのですが、積極的に話を聞くことで興味が湧いて面白く感じたので、もっと視野を広く持とうと自分の気持ちを良い方向に向けることができました。

英語に関して痛感したことは、日本語英語に慣れてしまっているのも簡単な単語でも発音に意識を向けないと相手に通じないということです。「予定している」という意味の“plan”という簡単な単語ですら、“プラン”とカタカナのように発音していると相手に伝わらず、議論が途切れてしまいました。発表においては、専門単語やキーワードなどは資料に載せていることが多いので、理解してもらえることが多いですが、逆に口頭でしか説明しない単語の発音はしっかり見直さなければいけないという反省点を見つけられました。

日本人がよく使う英単語と韓国人がよく使う英単語は必ずしも同じではなく、ポスターセッ

ション中の議論でたまに聞き慣れない単語がでてきて、話が食い違ってしまう事がありました。自分の発表をするときは自分が知っている単語だけで説明ができてしまいますが、相手の説明を聞くときは多少の意味類推ができたとしても、完全に分からない単語が出てきてしまうと話が止まってしまいます。これは自分の語彙力を上げれば解決できることだと思うので、英単語の暗記を中心にもっと英語の勉強に励もうと思います。また日本で勉強するだけでなく、外国人との会話をするのが語彙力を伸ばすことには必要だと改めて感じました。シンポジウムだけではなく、これからもなるべく外国人と英語で話せる機会を積極的に探していきたいと思いました。

私はこのシンポジウムで、プレゼンテーションの他にも「座長」という役にもトライしてみました。日本語でもやったことがなかったので要領は悪く、時間を測りそびれてしまうなどの失敗もありましたが、この機会に練習ができて良かったです。基本的な司会進行の仕事の他に、そのプレゼンテーションにも質問できるくらい理解することが難しく、頭をフル回転させながらプレゼンテーションを聞くよう努めました。そうしているうちに、どこで「この研究では何がしたいか」など主張したい部分を探すのが上手くなった気がします。簡単ことではありませんでしたが、いろんな研究の話が分かるととても面白く、自然と質問もでてくるようになりました。また、主張したい部分を探すコツを身につけたことで、自分の発表でもどこに主張したい部分を入れると効果的に伝わるかなどを考えるようになり、より良い構成を考えられるようになったと思います。

日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加して、プレゼンテーションに関しても英語に関してもたくさんの反省点を見つけられました。これからの研究発表やその他いろんなことに活かしていきたいと思います。また、新しい経験や慣れないことでもトライすることで何かしら成長できることを改めて実感できたので、たくさんのことに躊躇せずにトライしていきたいと思います。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

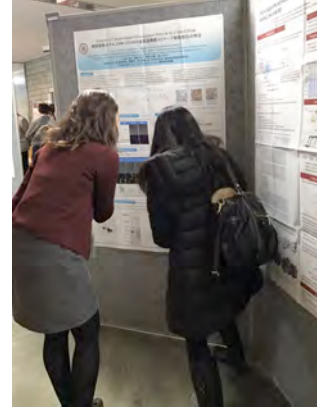
参加者名(Name): 山田 未佑

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教員(supervisor): 相川 京子)

発 表(Presentation): Analysis of Cancer-related Glycosylation Sites on ALCAM

今回のシンポジウムを通して最も強く感じたことは、失敗を恐れすぎず、主体的に取り組むことの大切である。

私が海外に行ったことがあるのは一週間程度の旅行くらいで、英語を話す機会はこれまでほとんどなかった。そのような状況の中、英語で研究内容の発表を行うことはとても高いハードルのように感じられた。しかし、授業を通じた口頭発表の練習をするうちに、自分が苦手な英単語の発音が何なのか、どのように発表を行えば相手に伝わりやすいのか等、なんとなくコツが掴めるようになってきた。そうすると、今度は質問対応やポスター発表、雑談等、台本のない英会話に対する不安がさらに高い壁となって現れた。



楽しみな気持ちと不安な気持ちの両方を抱えたまま韓国に到着し、シンポジウムが始まった。初日は梨花女子大学・日本女子大学の学生との交流会を控えていたため、それが始まる前に代表者同士で少し打ち合わせをすることになった。私は代表者の一人であったため打ち合わせに参加したが、きちんと言いたいことを伝えられるだろうかと不安になった。案の定、相手の言っていることを聞き取ることはできるのだが、それに対して適切に答えたり、思いついたことを英語で伝えたりすることがほとんどできず、不安が現実のものになってしまった。来訪を歓迎する言葉や気遣いにうまく対応できなかったり、話し合いを他の代表者たちにはば任せっきりにしてしまったことが、とてももどかしくて悔しかった。そして、日本からの参加者の英会話力もちろん尊敬していたが、交流会で率先して司会進行を務めていた梨花女子大の学生の流暢な英語に圧倒され、シンポジウム開始からわずか 2 時間足らずで、こんな風に話せたらな、と憧れを抱いていた。また、交流会のゲームで梨花女子大の学生とペアを作って会話していたのだが、私が言いたいことを英語に変換できず動揺していると、「無理をしないで」と相手に気を遣わせてしまい、頑張らねばならないと感じた瞬間であった。交流会自体は、たくさんの方の協力のお陰で盛り上がり、とても安心した。

2 日目は分野ごとに分かれた 4 つのセッションで、口頭発表を控えていた。セッション開始前の準備中に、梨花女子大の代表者の方が何人か挨拶をしてくれたのがとても嬉しく、緊張が吹き飛ぶような思いだった。しかし、英会話にはまだ抵抗を感じており、言葉に詰まった時に笑顔を見せるのが精一杯だった。セッションが始まると、再び梨花女子大の方達に圧倒された。自身の発表や質疑応答、他の人の発表内容に関する議論までも、まるで母国語を話しているかのように英語を使っており、初日に抱いた感覚が正しかったことを改めて自覚した。それだけではない。学生が交代で行う司会でも、梨花女子大の方はこのような機会に慣れている印象を受けた。このことを最も実感したのは、ちょっとしたトラブルが起きた後だった。ちょうど私が担当分の司会を終了した時、次の司会者の姿が会場になかった。次の司会者は梨花女子大の方だったため英語でどうにか状況を打開する外なく、焦りつつも、何とか電話で連絡をとってもらうことに成功した。すると、彼女は病院に行っていて今は大学にいないとのことで、私が続けて司会を行うことになった。司会を務めていた途中、次の発表者の紹介に入る前、次の司会者が会場に到着し、「今までありがとう、ここからは私がやります」と私の元に駆け寄ってきてくれた。彼女の体調が心配ではあったが、そこで司会を代わってもらった。その彼女の司会が本当に素晴らしかった。私が司会を行っていた時

は、常に司会原稿を見てその通りに進めていたが、彼女はそもそも原稿を持っておらず、常に聴衆の方を向いて自分の言葉で話していた。更に、他の司会者は誰も行っていなかったのだが、発表後だけではなく発表前にも聴衆に拍手を促していた。その際に、「彼女に勇気を送ってあげてください」というような表現を使っており、もしかしたら定型句かもしれないが、粹な計らいを自然に行っていた彼女を見て、この人が司会者で本当に良かったと感じた。全員の発表が終わった後、私は思わず彼女に駆け寄り、「あなたは本当に素敵な司会者だった、早く元気になりますように」と声をかけていた。振り返ると、これが不安だった英会話を克服する第一歩を踏み出した瞬間だったかもしれない。

自分自身の発表は、緊張のせいで頭が真っ白になってしまい、質問の答えに必要な知識を忘れてしまったため、満足とは言えなかった。だが、冒頭の自己紹介の際に、当日思い立ったことが功を奏した。私は抹茶が大好きで、お昼休みの時間に売店で、日本では見かけない抹茶ラテと抹茶チョコレートを購入していた。自分が抹茶好きだと紹介する際、あらかじめ用意しておいた写真だけではなく実物があるとより伝わるのではないかと思い、実践したところ、会場を笑いで包むことができた。更に、「カラオケも好きです。カラオケをご存知ですか？」と自己紹介の別の項目で話したところ、梨花女子大の先生から「知っています」という相槌を頂くことができ、和やかな雰囲気の中で発表を進めることができた。

3 日目はポスター発表だった。他の人の発表を聞きに行く勇気が出せず、しばらく日本人同士で話していた。しかし、周りを見回した時、2 日目に同じセッションで発表をしていた梨花女子大の人と目が合い、このチャンスを活かそうと考え、彼女のポスターを見に行くことにした。微妙に分野の違う発表のすべてを理解することはできなかったが、私が投げかけたどんな些細な質問にも、彼女は根気強く答えてくれた。さらに、彼女も私のポスター発表を聞きに来てくれた。言葉をつまらせながら慣れない英語で説明する私の言いたいことを彼女が何とか理解しようとしているのを見て、本当に嬉しくなった。それと同時にこの3 日間のことを思い出し、自分が英語を話す努力をすれば、どんなに拙くても相手はどうにかして受け止めてくれるのだから、話さなければもったいないと感じた。こうなると、少しずつだが、会話への抵抗が薄れていった。ポスター発表後、マレーシアからの留学生におすすめの抹茶のお店の名前、最寄駅、駅からの行き方まで教えてもらい、帰国前の自由時間で実際にそのお店の前に立った瞬間、日本から出発した時の不安を拭うことができたと感じ、このシンポジウムに参加した意義を見出せたように思えた。

今までは、相手に下手な英語だと思われることが怖くて、困ったら黙ってしまっていた。しかし、シンポジウムを通して、相手との英語力の差が明白だからこそ、そこに甘えて積極的に飛び込んでいけばいいのだと考えられるようになった。3 日間で英会話力が向上したとは言えないが、意識を変えられたことは大きな収穫だと思う。そして、このようなことは英語に限らず大切なのではないかと感じた。必要以上に怖気付いてしまっていることを、このシンポジウムでの経験を思い出し、一つずつ克服していきたい。それだけでなく、今まであまり交流のなかったお茶大の他の学科・学年の方とも知り合えたことが嬉しかった。また、そもそも発表に関して場慣れしていなかったため、今後も英語を使う機会や発表の機会を活かし、経験値を増やしていきたい。そしていつか、様々な国籍の人と英語で雑談を交わせるようになればと思う。

最後に、このシンポジウムに関わって下さった全ての方にお礼を言いたい。僭越ながら、来年度以降も素敵な交流の場になることを心より祈っている。

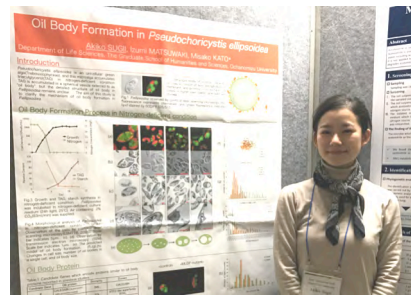
第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 杉井昭子

所 属(Affiliation): ライフサイエンス専攻 生命科学コース
(指導教員(supervisor): 加藤 美砂子)

発 表(Presentation): Oil Body Formation in Microalgae

私がこのシンポジウムに参加するのは今回で二回目だった。学部2年のとき、自主研究のポスター発表で参加させていただき、今回は大学院生として、英語での口頭発表とポスター発表を行なった。学部2年のときは、同じ研究を行っていた3人の同級生と共に、ポスターで研究内容について説明していたが、自分の英語コミュニケーション能力の乏しさを痛感した。梨花女子大学の学生は研究、英語のレベルが非常に高く、圧倒されると共に、悔しさを感じたのを覚えている。



私は最初に参加したシンポジウムを機に、英語でのコミュニケーション能力を上げることに力を入れるようになった。例えば、イギリスへの短期留学や、オンラインの英会話レッスンなどに取り組んできた。今回のシンポジウムに参加したのもその一環であり、同時に、前回のシンポジウムのときに比べて自分の英語コミュニケーション能力がどれほど上がったのかを知りたいという気持ちもあった。また、4年生のときから3年間行なってきた研究成果について、他の分野の方からフィードバックをいただき、他の研究の発表を聴いて自分の研究のアイデアを得ることも、今回のシンポジウムに参加した目的の一つだった。

前回は、口頭発表を行う大学院生の先輩方についていく立場だったが、今回、私はお茶の水女子大学側の学生代表者として参加した。学生代表者は、梨花女子大学と日本女子大学の学生代表者と共に、シンポジウムの1日目に行う学生交流イベントの企画を考える。シンポジウム当日だけでなく、事前に梨花女子大学の学生と交流しながら共に企画を行うことに興味を持ったため、代表者を務めることにした。シンポジウムの場だけの形式的な交流にとどまらず、シンポジウム後も日韓の学生の交流が続くためにはどのようなレクリエーションをするのが良いかを考えた。話し合った結果、日韓の学生でペアになり、二人の共通点を探すゲームと、10人のグループをつくり、日本と韓国に関するお題を英語で伝達する伝言ゲームを行うことにした。英語で話し合いをする機会は今までほとんどなかったので、最初は自分の意見を英語ではっきりと他の代表者へ伝えることに苦労したが、話し合いを重ねるにつれて、自分の言いたいことをそつなく伝えられるようになった。当日の学生交流イベントでは、ペアでの共通点探しのゲームで学生が一对一で話すことや、日本と韓国に関するお題を伝えるチーム対抗のゲームを通して、日韓学生間で多くの交流が生まれたようだった。翌日以降、学生交流イベントで知り合った学生同士が話している様子を数多く見て、企画に携わった一人として、大きな達成感を味わうことができた。また、私自身も、イベントの企画を通して梨花女子大学の学生と知り合い、現在も連絡を取り合っている。

自分の研究の口頭発表を英語で行うことは今回が初めてだった。日本語で他の分野の人に研究内容を説明するだけでも難しいが、英語での口頭発表の場合、言い回しや細かいニュアンスにも気を使う必要がある。シンポジウム前に大学で受けた授業では、国際的に通用する英語を話せるように、発音、アクセントや表現に気をつけながらプレゼンテーションの練習をした。事前の練習の甲斐もあり、本番では落ち着いて発表し、質問にも詰まらずに答えることができた。しかし、他の発表者のレベルの高いプレゼンテーションを見て、自分のプレゼンテーションを今後さらに磨いていきたいと思った。特に、発表するときの口調、話の流れのつくり方、アイコンタクト、スライドのデザインなどは、まだまだ改良の余地がありそうだ。

他の人の発表を聴くことに関しては、私は予め、発表に対してなるべく多く質問をするという目標を立てていた。以前に参加した大規模な学会では、初歩的なことを聞いてしまうことを

恐れ、質問ができなかったのだが、今回はより主体的に他の人の発表を聴くようにしたいと思い、この目標を持ってシンポジウムに臨んだ。当日は、いくつかの発表で質問をすることができたので、目標を達成できたと考えている。ただ、質問をする上で、自分のリスニング能力に課題があると感じた。特に、梨花女子大学の学生の中には、ネイティブのように英語を使いこなしている人もいて、そのような人の発表は流暢であるが故に、聞き逃して、内容をしっかり理解しきれないことがあった。それによって、的外れな質問をしてしまったこともあった。英語でのコミュニケーションを考えると、どうしても自分がいかに発信するかを重視しがちだが、私の場合、相手の話をしっかり理解する力を鍛える必要があるのではないかと考えている。ただ、質問をして主体的に発表を聴くことを心がけたおかげで、他の研究内容から、自分の研究で役に立ちそうなヒントを得ることができた。3日目のポスター発表でも、私の専攻である生物学以外の分野の人とも話し、いつもとは違う視点を得た。

シンポジウム全体を通して、自分の英語コミュニケーション能力の現状を知るとともに、英語でコミュニケーションをとることに一定の自信を持つことができた。特に、滞在中の現地の人とのやり取りで、学部生で参加した前回からの成長を実感した。前回は、英語を話すこと自体に自信がなく、道を聞くときも同行者に頼るほどだったのが、今回は、わからないことなどがあると、躊躇せずに、すぐに近くの人に聞けるようになっていた。また、韓国の様々な文化に触れ、日本との共通点や相違点を考える良い機会となった。シンポジウム前に交流イベントの企画をする段階でも、ゲームの企画のため、日本と韓国の文化に関するお題を調べていて、意外と日本と韓国の共通点が多いことを知った。今回は前回のシンポジウムに比べて、梨花女子大学の学生との交流が多かったことで、現地の学生の人柄に触れることができた。今回知り合った韓国の学生と今後も交流を深め、日本と韓国が様々な面で協力していくことに、何らかの形で少しでも貢献できたらと考えるようになった。

私は今年で修士課程を修了し、来年度からは外資系の B to B 企業に就職する予定である。就職先の会社では、様々な国籍、バックグラウンドの社員と働く機会が多いと聞いている。今回のシンポジウムの経験は、これから入る会社でも大いに役に立てたい。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 中條佑美

所属(Affiliation): ライフサイエンス専攻生命科学コース (指導教員(supervisor): 近藤るみ)

発表(Presentation): A study on host shift in *Drosophila sechellia*.

今回、このシンポジウムに参加したことで、多くの貴重な経験を得られたと感じております。

私は元々英語に苦手意識を持っており、真剣に英語を勉強する動機付けのために、このシンポジウムへの参加を決めました。英語は論文を読むことが精いっぱい、話した経験はほとんどないという状態であったため、英語での研究紹介は、準備段階から苦労の連続でした。しかしその中で、今までなるべく避けてきた英語に毎日向き合い、相手に何とか伝えようと試行錯誤したことで、自然な英語の作文や発音など語学力を伸ばすことができましたと感じています。さらに、約2か月の間、英語プレゼンテーション法研究の授業において、担当の由良先生のご教授で、発表の際の話し方のポイント、スライドのデザインや見せ方のコツなど、英語だけでなく、プレゼンテーションの方法全般を習得することができ、非常に勉強になりました。中でも、専門外の方々にもわかりやすく理解してもらえるような、“一目見て言いたいことが伝わるスライド”になるよう、繰り返し添削してくださったことは、大変ありがたいことでした。



実際にシンポジウムに参加し、強く感じたことがあります。それは、英語を使うことをしり込みしてはいけないということでした。シンポジウム1、2日目、私は英語が未熟なため、あまり積極的に梨花女子大の学生の方に話しかけることができませんでした。1日目の学生同士の交流会では、相手のことをもっと知りたい、仲良くなりたいと思っても、それを伝えることができない。さらに、2日目の口頭発表でも、研究に興味を持ち、質問したくても、何と云えばよいのか分からないなど、非常にもどかしい思いをしました。私にとって初めての海外経験であったため、英語が話せないと自分から何も意思を発信することができないという初めての経験にショックを受け、英語の勉強の大切さを、身をもって知りました。

しかしシンポジウム3日目、ポスター発表の際、梨花女子大の先生に英語で研究紹介をするという機会が突然訪れました。つたない英語を駆使し、身振り手振りを交え、必死に説明したところ、思いがけず話が弾み、充実したセッションになったと感じました。この経験から、どんなにつたない英語でも、相手に伝えたいという熱意を持って発信することが非常に大切であることを学びました。1、2日目のように、流暢に話すことができないからとしり込みして、黙っているだけでは相手も自分も何も得ることはできません。とにかく熱意を持って伝えようとすることで、互いに交流することができると体感できたことが、このシンポジウムで得た最も大きな経験でした。しかし同時に、やはり不自由な英語では、自分が伝えたいことの半分も伝えることができないということも痛感しました。自分の研究に対するヒントを得るため、様々なコメントをもらいたいと思うものの、自分の考えをうまく伝えることができず、十分なディスカッションができなかったという場面がありました。日本語だけでは、日本人にしか伝えることができない。世界の研究者の方に自分の研究を知ってもらい、ディスカッションするためには、やはりある程度以上の英語力が必須であることを思い知りました。今までは、論文英語を読むことさえできれば、研究には全く支障がないと考えていましたが、その甘い考えを改める良い経験となったと感じます。もっと早い段階でこのような経験をしていれば、現在よりも真面目に英語の勉強に取り組んでいただろうと思う次第です。

さらに、印象的だったのは、梨花女子大の学生の方々が非常に流暢な英語で研究紹介を行っていたことです。日本から参加した私たちの多くは、英語の台本を暗記し、発表に臨

みました。しかし、梨花女子大の学生の方々の英語は非常になめらかで、楽しんで発表を行う余裕が感じられ、彼女たちが堂々と英語で発表を行う姿に、大きな刺激を受けました。

このように、語学の面で大きな刺激を受けると同時に、初めての海外経験という点でも、多くのことを学ぶことができました。梨花女子大の学生や先生方は常ににこやかに、明るく接してくださり、緊張している私たちをリラックスさせて下さいました。特に、先生方が本当に気さくに私たちに声をかけてくださることに驚きました。正直、韓国の方々は日本にあまり良いイメージを持っていないのではと思い込んでいたため、始終友好的な雰囲気であったことをとてもうれしく感じました。さらに、最終日に観光した際も、私たちが困っていると、にこやかに声をかけてくださる方が多くいることに驚きました。テレビのニュースやインターネットの情報で、隣国を知った気になっていましたが、それはほんの表面的な部分で、実際に訪れて初めて分かることがたくさんあるのだと感じました。この機会がなければ、韓国の方々の気さくさ、親切さを知らないままであったと思うと、本当に今回のシンポジウムに参加して得られたものの大きさを感ずるのです。

このシンポジウムも今年で第7回目ということで、毎年開催に尽力してくださっている3女子大の先生方には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。これからもぜひ、このような交流の機会を継続して頂きたいと考えています。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名: 輿石 めぐみ

所 属: 理学専攻 物理科学コース (指導教員: 森川 雅博)

発 表: Quantum fluctuation and Classical fluctuation in the Inflationary Universe

2016年12月6日から8日の間、日韓3女子大学交流合同シンポジウムにおいて研究発表を行いました。数学、物理学、化学、生物学など自分の専攻と異なった研究をしている人にも理解しやすいように研究発表をすることを目標に、毎週英語プレゼンテーション法研究の講義をして下さった由良先生をはじめ研究室のメンバーにもたくさんの意見を頂くことができました。私は今までプレゼンテーションシートを作成する際、傍聴者に分かりやすく作ろうとは意識していたものの、自分の伝えたい結果や手順などが先行してしまい、いざ全体像を見てみると、プレゼンテーション内での理論がごちゃごちゃして分かりにくい発表だったと思います。しかし、韓国へ行くまで毎週の講義内で先生や学生からたくさん質問や意見を貰い、また上手く発表している人を参考にしたりして、発表まで時間の許す限りプレゼンテーションシートに修正を加えて仕上げていきました。

今回の日韓シンポジウムの経験は、英語でプレゼンテーションを行うスキルはもちろん、どう説明したら上手く伝わるかなどのプレゼンテーションにおける基本的な能力向上にも役立ちました。また、私が社会人になったときにも役立つ大切な経験になるだろうと思いました。

私は物理セッションに参加したのですが、同じ物理分野でもやはり宇宙や素粒子、物性など研究テーマの分野も様々で英語で発表するのにも苦労しましたが、発表者に質問するのにもとても苦戦してしまいました。もっと普段から自分の研究室で行われるゼミでたくさん質問できるように注意して発表を聞かなければいけないと反省しました。また梨花女子大の学生は、日本の学生よりも積極的に質問をしていたように思いました。物理セッションが終わり、残りの時間は生物セッションで発表を聞いていたのですが、自分の意見や疑問を率直に伝える姿に、梨花女子大の学生の研究に対する意欲の高さを感じました。また、今回の日韓シンポジウムでは修士課程、博士課程の学生のほかに学部4年生も参加していて、堂々と発表する姿から大学院生だと思っていた学生が話をしてみたら4年生だったということが何度もあり、感心してしまうと同時に「私ももっと頑張らないといけないな」と思いました。

3日目のポスターセッションでは物理セッション以外にも様々な研究の話を聞くことができました。口頭セッションでは理解しきれなかったことを聞いて、ほかの人がしている研究の楽しさやこれから応用できる可能性がどの研究でもあるのだと実感して、自分自身の研究意欲も向上できたと思います。

朝食、昼食、夕食のほとんどは、梨花女子大の方々が提供してくださいました。2日目の夜はお茶大と日本女子大の先生方、学生で焼肉を食べながら、普段どんな風に研究しているのか、休日などはどんなことをして息抜きしているのかを話しました。ほとんどの人たちが研究と一緒に空いた時間を見つけては趣味に打ち込んでいたのが印象的でした。

この食事会に韓国の学生の人たちがいなくて少し残念に思いました。お茶大と日本女子大だけでかなり多くの人数がいたので、全員が参加できる食事場所を見つけるのが大変だったのかもしれません。

今回のシンポジウムで驚いたことは、梨花女子大学の広大な敷地と充実した設備の数々です。大学内に映画館やコーヒESHOP、お土産屋のようなお店がたくさんあり、今回のシンポジウムの参加者以外の観光客も敷地内で記念撮影している人たちが多くいて改めて梨花女子大の規模の大きさを実感しました。また、大学内には朝鮮戦争より前に建てられた建物があり、何発もの大きな弾丸跡が残っていてとても衝撃的でした。

発表が終わった最終日は、ソウルを観光しました。この時期の韓国は大統領の機密漏えい事件で日本でも連日デモを行う様子が放送されていて行くまでの間、少し不安だったのですが、街も日本と変わらず平穏で、梨花女子大学内でもソウルの街でも日本語で会話しながら歩いていると韓国の人たちが日本語で「こんにちは！」と挨拶をしてくれました。道に迷っていると道案内をしてもらい、観光に不自由を感じることはほとんどありませんでした。また、ソウルでは英語よりも日本語のほうが通じることが意外でした。

日本と韓国は、様々な政治的問題でニュースになることが多いですが、今回実際に韓国に行ってみて大学内でも学外でも親切な方が多く、私はニュースで流れている一部分の（デモなどの）映像を鵜呑みにしすぎてしまったのかなと思いました。以前、シンポジウムを経験した方から韓国の学生から研究のことや、文化のことを聞けてとても良い経験になったと聞いて参加したのですが今回の日韓3女子大シンポジウムでも日本と韓国の学生が研究発表を通して交流できたことがとても嬉しかったです。

最後に、本シンポジウムに参加するにあたり、お茶の水女子大学の先生方をはじめ多くの方々のご尽力、ご協力を賜りました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、韓国で温かく迎えてくださった梨花女子大学の先生方、学生の皆様にも、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 川崎 波留

所 属(Affiliation): 理学専攻 化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 棚谷 綾)

発 表(Presentation): Development of Novel Nonsecosteroidal Vitamin D Derivatives
Based on the Structure of Lithocholic Acid

今回私が本シンポジウムに参加したいと思った理由は、自身の研究内容を英語で説明できるようになりたいと考えたからだ。今後、学会などで意見交換する際に英語でもディスカッションする能力を少しでも身につけることができれば、研究をより有意義なものにすることができるのではないかと考えた。私の専門である化学にとどまらず理系の専門用語を英語では何と言うのか、またどのように発音するのかを知る機会がこれまでにほとんどなく、私は独学だけで学ぶことに限界を感じ

ていた。また、事前に授業にて自身のプレゼンテーション能力を向上させる機会があったことも、本シンポジウムに参加する決め手の一つとなった。加えて、世界を相手に仕事がしたいと思う私にとって、海外で日本人以外の前でプレゼンテーションをする機会はとても貴重なものであった。

いただいた機会は最大限に活用し、貪欲にできるだけ多くのことを吸収したいと意気込んで、本シンポジウムに臨んだ。以下に、今回の活動とそこから得た学びについて報告する。

シンポジウム前に受講したプレゼンテーション法研究の授業では、徐々に発表時間を長くしながら発表練習をおこなった。やはり、専門用語の発音に苦戦したが、間違いを指摘される度に正しい発音、言い回しを学ぶことができた。質疑応答では、日本語では簡単に答えられることも英語となると専門用語の英単語が出てこず言葉に詰まることが何度もあったがその都度正しい表現を調べることで、少しずつではあるが発表を重ねる毎にうまく言葉を返すことができるようになった。英語に関する能力だけでなく、どのようなプレゼンテーションが聞き手に「伝わる」プレゼンテーションなのかを、自分以外の発表者のプレゼンテーションを聞き、またそれに対する先生のアドバイスを聞くことで学び、自分の発表で意識するようになった。話すスピード、声の音量、話の抑揚の付け方、目線の配り方等、自分一人で練習するだけでは意識できないことも、聴衆を前にして練習を重ねることで意識して発表できるようになった。

シンポジウム1日目は、先生方による講演(Professor Session)と、梨花女子大の学生との交流会が行われた。梨花女子大生との交流では、現地の学生だけでなく日本女子大学の学生や、お茶の水女子大の学生とも学年を超えて英語で交流した。

シンポジウム2日目は、前日に引き続き Professor Session と、それぞれの分野ごとに分かれて研究内容を発表した。プレゼンテーション形式での発表で、練習の成果を披露した。事前に学んだ「伝わる」発表を本番でも意識してできたのではないと思う。他大学(梨花女子大、日本女子大)の学生の発表を聞く場面では、お茶大ではしていないような研究ばかりで興味深いものが多くあった。しかしながら、親しい分野ではない内容を日本語ではなく英語で理解するには一回の発表を聞くだけでは不十分であったことを痛感した。できるだけ分からなかった箇所は質問するようにしたが、それでも理解が十分であったとはいえない。日本女子大の学生とは発表後の休憩時間に個人的に研究内容についてディスカッションする場面もあったが、お互いの理解を深めるために話していたこともありその会話は日本語で行われた。今後はこのようなディスカッションも英語でできるのが理想なのだろうと感じながらも、普段聞けないような研究内容について話すことができたのは有意義な時間であった。また今回のシンポジウムにおいては、座長の経験もさせていただいた。座長としての経験とこのプレゼンテーションを通して感じたのは、コミュニケーションをとるにはリスニング力が必要



不可欠であるということである。私が座長を務めたセッションで、英語でされた質問の意味が分からず発表者がその質問に答えることができない場面が何回か見受けられた。私も質問者の英語が理解できたときは簡単な英語に噛み砕いて発表者に伝えるよう試みたがそれもうまくいかないことがしばしばであった。もしも質問者の英語が理解できれば、流暢な英語でうまく伝えられなくとも単語やボディランゲージを駆使すればなにか伝えることはできただろうが、質問の意味すら分からなければ、言葉をかえすことすらできない。このことを目の当たりにしたときに、コミュニケーションをとる上でリスニング力はスピーキング力よりも大切なことなのだと感じさせられた。発表をすることときには、もちろん伝わる言い方で分かりやすく話すスピーキング力が必要であるが、コミュニケーションとなるとスピーキングだけでは成り立たない。今後の日本人の英語力の向上のためにはリスニング力も鍛える必要があるのではないかと感じさせられた。

シンポジウム三日目は、午前中にポスターセッションをおこなった。ポスターセッションでは、梨花女子大と日本女子大の気になる研究(特に化学分野)について話を聞くことができた。自身のポスターについても指摘を受けたり、意見を頂いたりと有意義な時間を過ごすことができた。

三日間の韓国滞在では、研究交流のみならず韓国の文化に触れることもできた。滞在中は梨花女子大の学生食堂や大学外の店舗で韓国料理をいただいたり、三日目には景福宮を訪れたりと韓国の文化を肌身で感じた。

私は本シンポジウムに参加したことで、理系としての英語力の向上のみならず、プレゼンテーション力の向上に繋がったことを実感した。また、外国の地での国際交流は普段の生活ではなかなか経験できないことであったので、大変貴重な経験であった。これら経験は今後の大学院生活、そして社会にでてからも役に立つものであると確信するとともに、今回学んだことを積極的に生かし、研究・勉学に励んでいく所存である。また今回のシンポジウムにおいては、発表賞(Best Presentation Award in the 7th EJO Joint Symposium 2016)という素晴らしい賞を賜り、今後の研究生活の励みとなった。

最後に、ご指導賜りました由良先生を始め、諸手続きのサポートをしてくださった大学職員の皆様、韓国で私たちを温かく迎えてくださった梨花女子大の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 楠本 美侑

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教員(supervisor): 鷹野 景子)

発 表(Presentation): Quantum Chemical Interaction Analysis between HIV-1 and PGT Antibody

Before this symposium, I have never given a presentation about my research outside the campus. In addition, I am not good at speaking English smoothly. Only after I consider the order of English words intensively and check whether it is correct or not, I could make a decision to speak. Moreover, I did not know Korean life style so much. For participating in this event, my objectives were to learn how to give a better presentation and explain my research well, to speak English without excessive preparation, and to figure out differences between Japan and Korea.

I learned from other students' and Professors' presentations that when I give a presentation, the important thing is to make audience feel easy to understand. For example, one of



the students started her talk saying that she would present a brief outline of her presentation for the benefit of those who do not major in analytical chemistry. In a professor talk, the presenter specifically pointed out the differences in the preferred description of the protein structures between computational chemists and biologists. They described my circumstance therefore my concentration power was increased during the presentation indeed. These presentations made me recognize that I should try to grasp the background knowledge of the audience. For another example, I should use specific examples that are close to the audience. Using a part of a body or an example from daily life is effective. The description of the shape of protein combination could be replaced by a finger crossing over another finger. The scale of the cell could be explained by drawing analogy between the proteins and each person in the audience. Moreover, in one of the presentations by the student, the food containing Vitamin D was an understandable and attractive introduction. The metaphor of substances made audience interested in the presentation. I try to consider the specific examples about my research. For example, the key of my research is interaction. The metaphor of key-keyhole is easy to understand. Also, the scales of the virus and antibodies are in the size of nanometer or larger. I will train myself for rewording continuously.

Speaking English by no preparation was difficult for me. In the social event on the first day, I tried to say something anyway even if the grammar is not completely correct. Even in that situation, we could enjoy talking and exchanging much information from general custom of each country to personal topics. Also, during the cultural quiz, I tried to ask the Korean culture and to give information about Japan in detail. In the oral presentation on the second day, my presentation was good because of the practice. During the question and answer time, a professor at Ewha Womans University gave me a comment. I considered the interaction energy only, but the importance of the activation energy was pointed out. I will think about that point. Another professor asked me what was the difficulty of this research. Before the symposium, I considered it, but did not answer to myself. Actually, to answer what was the difficulty was the most difficult thing, but I thought hardly and translated in English. Ideally, thinking in English from the beginning is better, so I should train that point, too. Now when I would like to ask questions, I spent only a few moments for building sentences. This was a

big progress for me, because I could reduce the preparation time for considering word order. When I have a question, I can now give a priority to the action of asking itself. In the poster session on the third day, I went standing in front of a poster with no English sentence preparation. The student from Ewha Womans University told me her research very intensively using many rewording. I tried to understand her research, and also she tried to tell. I think it was good that I held on to her explanation to ask the meaning of various words many times. Throughout the three days, I felt that the students of Ewha Womans University were good at rewording using simpler words. They tried to reword many times until I could understand. I think rewording training is good for increasing English vocabulary.

In the city, one of the differences between Japan and Korea is the railway platform doors. In Seoul, all stations have full screen type doors. This type is expensive, so the condition is quite surprising. In Japan, the design of stations cannot be allowed the weight of the platform screen doors, so the railway company needs large amount of spending for installing that type of doors. I think the platform screen doors which Japanese company is easy to introduce should be developed further and more widely used. As another point about platform screen doors, a message for the passengers of closing doors is not announced in Korea. In Japan, we knew when the door closed by sound. The passenger safety in Japan should be proud of. Another example of the difference is quietness. Not only the people in the city but also the students in the University were quiet. Up to that day, I thought Japanese were the quietest people with no basis. I will try not to believe until I go there and confirm by my own eyes.

Consequently, I learned how to make effective presentation. In the effective presentation, an important and difficult concept is explained using examples familiar to the audience. My next step for speaking English is to talk anyway, not to mind grammar excessively, and to say the same content in different wording. In order to improve my English, I try to increase the opportunity to speak English. For example, to attend the social meeting in study group or Skype with friends in Ewha Womans University. All things should be done of my own accord, so I will try. Also, I feel that understanding the foreign country makes me realize the difference between Japan and the country.

This symposium made me learn a lot of things. I appreciate the effort of Prof. Kei Yura for giving me warm guidance many times and Prof. Keiko Takano and Dr. Kaori Noto for giving me the opportunity to participate in this symposium and much important advice up to the last moment. I also appreciate all the efforts of Ewha Womans University for making the symposium successful one.

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 重永 皐月

所属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科 理学専攻 (指導教員(supervisor): 矢島知子)

発表(Presentation): Visible-light hydropyrufluoroalkylation using perfluoroalkylbromides as a radical precursor

今回、12月6-8日に開催された第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加してきました。本シンポジウムは、お茶の水女子大学、日本女子大学、そして韓国の梨花女子大学の3大学間で行われる研究発表会であり、自分の研究について英語によるポスター、口頭発表を行いました。

シンポジウム開催までに、毎週、口頭発表に向けたプレゼンテーション授業に参加しました。この授業では、発表資料であるパワーポイントの作成、そして、英語による発表練習を行いました。発表後は、英語による質疑応答も行われました。聞きたいことがあるのに英語に直せず、また、質問したいのに英語で伝えられず、とても苦労しました。そして、自分の発表について、先生から基本的な英語のフレーズ、発音、スペルなど細かい部分までご指摘いただき、非常に丁寧な指導をしていただきました。シンポジウムの1週間前に学内リハーサルも行い、本番に向けた準備をしっかりとこなしていくことで、英語で発表することへの自信をつけることができました。



12月6日の朝、羽田空港を出発し、金浦空港から梨花女子大学へ向かいました。大学の周りにはカフェや雑貨屋など、おしゃれなお店が多く並び、大学の周りがとても賑わっていることに驚きました。また、大学に着いてからはその設備の素晴らしさに驚かされました。広大な敷地の中にコンビニやカフェ、雑貨屋などの娯楽施設があり、さらに、広々とした食堂は豊富なメニューを揃えていました。シンポジウムは午後から行われ、最初に梨花女子大学の先生のご講演を聞きました。その後、梨花女子大学の学生とゲームで交流を図る場面では、梨花女子大学の学生から積極的に声をかけていただき、英語を使って簡単な会話ができることができました。また、このゲームを通じて、梨花女子大学だけでなく、日本女子大学の方々とも交流することができました。

2日目に口頭発表を行いました。午前中に先生のご講演を聞いた後、各専門分野ごとに学生の発表が行われました。梨花女子大学の学生はとても英語が上手く、発表から質疑応答までスムーズなやり取りが行われました。また、堂々と、楽しそうに発表する姿がとても印象的でした。一方、お茶の水女子大学の学生も、本番に向けてしっかりと準備をし、以前よりも発表が格段に上手になっている姿がうかがえました。私も発表では多少ミスがありましたが、最初から最後までしっかりと発表をこなすことができました。しかし、質疑応答の際、質問してくださった先生の英語を聞き取ることが出来ず、何を答えたらよいか分からず、とても困る場面がありました。しかし、お茶の水女子大学の学生からの助けもあり、質問の内容を理解し、身振り手振りを使いながら、質問の返答を英語で必死に伝えようと努力しました。発表を終えて、英語が聞き取れなかった場合の対処法などをしっかり考えておくべきだったと思いました。また、聞かれると思われる質問を予想し、英語による答えなど準備しておくべきであったと感じました。今回、英語によるディスカッションの難しさを身をもって感じました。しかし、反省するべき点も見つかったため、今回の経験を今後の発表に生かしていきたいと思いました。

そして、3日目にポスター発表を行いました。ポスター発表を行う学生数は、口頭発表を行った時よりも多く、会場にはたくさんのポスターが並び、非常に賑わった様子がうかがえました。日本女子大学の学生の方にポスターを聞いていただき、大学間の交流を図るとも

に、研究についてディスカッションを行うことができました。また、梨花女子大学の学生のポスター発表も聞かせていただきました。やはり、梨花女子大学の学生は英語が上手く、発表も慣れた様子で行っていました。そして何より、研究内容がとても興味深く、研究のレベルの高さを感じました。

私はこれまで、ポスターによる学会発表は何度か行ってきましたが、英語による口頭発表、そして海外に行くこと自体が初めての経験でした。自らの研究について英語でディスカッションが行えること、また様々な研究者と英語でコミュニケーションが取れることは、研究の幅を広げることに繋がります。そして、公用語である英語を習得することは、研究者として欠かすことのできないことだと思います。そのため、私にとって今回のシンポジウムは非常に良い機会となりました。当初は、自分があまりにも英語が苦手であるためシンポジウムに参加するかどうか迷いました。しかし、今までにない経験を積むことは自分の成長に繋がると思い、シンポジウムへの参加を決めました。シンポジウムに向けた授業を通じて、英文の書き方、英語の発音の難しさを体験しました。そして、実際の発表では練習だけでは感じなかった、ネイティブな英語の聞き取りづらさを感じ、自分の英語がまだまだ実用的ではないことを実感しました。しかし、いまの自分のレベルを知れたことで、英語の勉強を行うモチベーションの向上にも繋がりました。今では、本シンポジウムに参加して本当に良かったと思います。英語による発表の難しさや、英語でのコミュニケーションの大切さを身をもって感じる事ができるとも貴重な経験となりました。

今回、このような機会を頂けたこと、またご丁寧な指導をしてくださった由良先生、そして、3 日間の会場設営、朝食、夕食の手配をしてくださった梨花女子大学の学生、先生方、本当にありがとうございました。この経験を活かして、国際学会等へ積極的に参加し、研究者として更なるレベルアップが出来るよう日々精進したいと思います。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 中村 早希

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教員(supervisor): 矢島 知子)

発 表 (Presentation): Functionalization of Fluorocarbon-Hydrocarbon Alternate Copolymer

今回のシンポジウムは、私にとって初めての英語発表の機会となりました。論文をはじめ、先生方とのディスカッションなど、研究する上で、英語は欠かせないツールですが、実際に日常の中で使用することはほとんどなく、苦手意識を抱いたままになってしまっていました。しかし、このシンポジウムの参加を決めたことで、これまでより積極的に英語に触れようという意識が向上しました。最初は不安でしたが、発表練習の授業では、内容に対するアドバイスに加え、発音やアクセント等、細かくご指導をいただいたため、人前で英語を話すことに対して徐々に自信がついていきました。また、毎週他の学生のプレゼンテーションが見られたことも、非常に勉強になりました。普段見ることのできない、物理や生物、情報を専攻する学生の研究内容は大変興味深かったです。自分以外の発表を聞くことで、姿勢や話し方、スライドの作り方など参考にしたいと思う部分が多く見つかり、英語であるかないかに関わらず、他分野の聴衆に自分の研究内容をわかりやすく伝えるための工夫やテクニックを吸収することができました。



韓国に到着した一日目は、まず、梨花女子大学の規模の大きさに圧倒されました。学生の人数もさることながら、広大な敷地に様々な施設があり、学生だけでなく子供連れの親子や観光客で賑わっていました。交流会では、はじめは不安と緊張で、同じ大学から来た学士同士でまとまってしまっていたのですが、ゲームや歓談を通して、梨花女子大学や日本女子大学の学生とコミュニケーションをとることができ、打ち解けることができました。

二日目の口頭発表は、昨日と同様、終始アットホームな雰囲気でした。そのためあまり緊張することなく、楽しんで発表することができました。私は「Chemistry」というグループ内での発表でしたが、私と同じように有機合成をしている学生から、細胞を用いて実験している学生、太陽電池材料の研究をしている学生まで細かい専門は多岐に渡りました。お互いにより詳しくない点が多かったためか、それぞれの発表に対して学生同士で質問が飛び交い、知識の交換をすることができました。特に、梨花女子大学の学生たちの英語は素晴らしく、プレゼンテーションも質疑応答も非常にスムーズでした。プレゼンテーションが安定していると質問もしやすく、議論が活発になることも改めて感じました。お茶の水女子大学の学生の発表も、堂々としており練習の成果が感じられた内容だったと思います。私自身も今まで一番落ち着いて発表することができました。しかし、梨花女子大学の先生に非常にクリティカルな質問をされた際、まず、内容を正確に聞き取ることが難しく、意味を理解するのにやや時間がかかってしまいました。また、それに的確に英語で答えることはさらに難しく、詰まりながらやっとの思いで答えるというような場面がありました。ここでされた質問は普段の学会で聞かれたことのある内容がほとんどで、予想できたであろう質問も多くあったため、どのようなことを聞かれるか、また、聞かれたら英語でどう答えるかというシミュレーションをもう少ししておくべきであったと反省しました。

また、三日目のポスターセッションでは、時間の大半を他の学生の発表を聞いて回る時間に充てたため、自分のポスターを紹介できたのは4、5人でした。ポスターの内容は口頭発表の内容とほぼ同じであったため、口頭発表の通りに説明すれば問題はないと思っていたのですが、実際は説明の途中で質問が入ったり、補足の説明が必要だったりと、思うようにいかないことばかりでした。相手の反応を見ると、正しく理解してもらえた部分と、伝わっていないであろう部分の違いがはっきりわかり、自分の英語での説明力不足を痛感しました。

これも、口頭発表の練習ばかりしていてポスターの準備が疎かになってしまった結果だと思います。ポスター発表は慣れているからといって気を抜かず、英語で説明する練習をしっかり行うべきであったと感じました。

以上のように、全体を通して力不足を感じる場面も多くありましたが、今回のシンポジウムは私にとって自分の世界を広げる大変良い機会となりました。国や文化は違っても、同じように化学を学ぶ学生が大勢いたことが、今後自分が研究をしていく上での刺激となり励みになりました。また、現地の人に英語で話しかけることに抵抗がなくなったことは私にとって大きな収穫でした。今までは、日本で外国人に話しかけられると焦ってしまい、きれいな英文で話そうとして頭で考えた結果、逆に言葉が出てこずに相手をがっかりさせてしまうことがありました。しかし、このシンポジウムを通して、英語を上達させるには、拙くてもいいからまず会話をしてみることが何より大事なのだと感じました。これまで培ってきた読み書きももちろん重要で必要な力ですが、実際に英語を言葉として使ってみて、伝わった、伝わらなかったという感触を得ることが次につながり、真の英語力が身についていくのではないかと思います。英語をコミュニケーションのツールとして使いこなせるようになれば、研究の幅も大きく広がり、これからの人生もより豊かになるはずです。韓国の若者は、名門大学である梨花女子大学の学生に限らず、街中のカフェの店員さんからエレベーター内で出会った人まで、当たり前のように英語を話していました。彼らとの会話を通じて、英語が話せないがためにコミュニケーションをとれないというのは非常にもったいないことだと感じました。今後、研究をする上で、外国人と話す機会は必ず訪れると思いますが、そのような機会があるかないかに関わらず、普段から英語を学ぼうという意識を持ち続けたいと思いました。

今回このような経験をさせていただけたこと、並びに英語だけでなくプレゼンテーションの仕方まで、毎回丁寧なご指導をしてくださった由良先生に深く感謝します。本当にありがとうございました。このシンポジウム学んだことを忘れず、これからも精進していきたいと思います。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

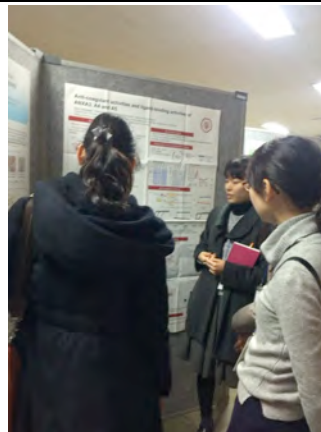
参加者名(Name): 宮川 瞳 (Miyagawa Hitomi)

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 相川京子)

発 表(Presentation): Anti-coagulant activities and ligand-binding activities of ANXA3, A4 and A5

私にとって、今回のシンポジウムは自分の研究を英語で発表する初めての機会であった。また、それと同時に海外渡航自体も初めてであったため、参加には不安もあった。しかし、指導教員の先生からすすめていただき、学生のうちにできる経験の大切さを思い、参加を決めた。その結果、授業や発表練習を通じて先生方にアドバイスをいただきながら準備をし、実際に英語で研究発表をし、韓国の学生とも交流をもったことで、自分の大きな糧となる経験ができたと思う。

シンポジウム参加にあたって、特に課題だったのは口頭発表であった。短い発表時間で聴き手に理解してもらうために、多くの工夫をした。今までも、国内での発表や教育実習といった活動の中で、話をわかりやすく伝える努力はしてきた。しかし今回、英語を使って、英語が母国語ではない方々に向けて発表をすることの難しさを感じ、特に発表の背景説明には苦労をした。ただ、渡航前にプレゼンテーション練習をする授業を履修したことで、少しずつ英語の発表に慣れることができたのは良かったと思う。毎回の授業で先生からご指摘をいただき、自分の中では当たり前になっていた内容でも、背景知識を持たない方には補足説明をしないと難しいことや、専門的な内容を説明する場合に図表を活用していくことの大切さなど、気づかされる点が多かった。また、授業を他分野の方とも一緒に受けることにより、多くの人に自分の研究に対する興味をもってもらうには、どのような伝え方がよいか考えるきっかけになった。また、質疑応答ではその場で、自分の言葉で説明をしなくてはならず、英語に慣れていない私にとってはとても難しかった。これも、授業の中でお互いの発表に質疑応答をしたり、自分でも本を読んだり、勉強をすることで少しずつ慣れていくことができたと思う。



実際の口頭発表本番では、生物分野のセッションで発表をした。自分の発表については、それまでの練習を生かし、なるべく聴衆の方をみて発表をすることができたと思う。ただ、聴き手の反応を見ていて、内容がきちんと伝わっているか、不安な部分もあったので、発表内容や話し方に課題があると感じた。また、質疑応答についても、質問の内容がわかり、答えたいことがあっても、それを英語にして自分の言葉で説明することはやはり難しかった。これからも英語を使う機会をもち、自分の研究を英語できちんと説明する力をつけたいと思った。

他の方の口頭発表を聞いていると、日本の学生は原理などを丁寧に説明したうえで実験結果を説明していく発表が多かったのに対し、韓国の学生は一般の学会のように実験結果をたくさん出して発表をしていたように感じた。しかし、韓国の学生の発表も、スライドで示す実験結果の図などがシンプルにまとまっていたのでわかりやすかった。今後英語で研究発表をする機会に参考にできる点が多かったと思う。ただ、異分野の発表では用語などがわからなかったり、聞き取れないこともあった。日常から英語に触れ、発表からより多くの情報を得られるようにしていきたいと強く感じた。また、発表を見ていて、生物系の研究の中に、シミュレーションなどの計算系のアプローチや、タンパク質の構造に注目して議論するものが多かったのは印象的であった。私の研究でも、タンパク質の構造やリガンドとの相互作用に関して、計算化学的な手法は取り入れているが、計算化学自体は私の専門ではないので、多くの研究に触れることで、自分の研究のヒントになるようなことを見つけられるのではないかと感じた。また、私の専門は生物化学であるが、生物のセッションには薬学、環境学、遺伝

学、情報学など様々な分野の発表者が参加していた。そのような異なる分野の研究者とディスカッションをするためには、データの示し方や問題提起のしかた、自分の研究の意義の伝え方などをしっかり考えておき、異分野の研究者が様々なアプローチで議論できるよう工夫することが大切であると思った。

ポスター発表では、研究分野が比較的近い方と何人か話すことができた。発表者と直接話すことで、細かい方法などについても聞くことができ、とても興味深かった。研究のアプローチの発想など、参考にしたい点も多かった。梨花女子大学の学生の話聞いた時は、自分の英語での質問がきちんと伝わるか不安な部分もあったが、発表者の方は質問に丁寧に耳を傾け、説明してくれたので、コミュニケーションをとることができた。前日の口頭発表を聴いていてわからなかった点などを質問し、理解を深めることができたと思う。今までは学会などのポスター発表でも、英語の発表というだけで躊躇してしまう部分があったが、積極的に聞きに行く姿勢が大切だと感じた。自分の発表に関しても、口頭発表とはまた違い、相手がどのような分野の研究者かによって、説明の流れや重点をおく部分を調節していく必要があると感じた。自分と同じようにタンパク質を扱っている方と話をしたときには、質問される点も鋭く、充実した議論ができた。

学生どうしの懇親会では、代表者の方が中心となって考えた企画で、研究発表とはまた違った交流をもつことができた。韓国という隣の国で、共通点もたくさんあったが、その国ならではの特徴も多くあり、異文化交流ができたことはとても有意義であった。今回初めて海外に出てみて、自分の視野が広がったと思う。

今回の研修を通して、新たな経験をたくさんすることができた。これまで英語で発表をした経験がほとんどなかったため、準備には苦勞をし、本番でも反省点が多かった。しかし、わかりやすい発表をするために試行錯誤したことや、実際に海外に出て発表する経験をしたからこそ学ぶことができたこともたくさんあったと思う。また、多くの学生の発表を聴いたことで刺激を受け、今後参考にしたい点を見つけたことで、自分の研究へのモチベーションの向上につながった。参加をすすめてくださったり、研究発表をする上でご指導くださった先生方に感謝したい。そして、今回学んだことをこれからの自分の研究活動にも生かしていきたい。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 山中 聡美

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 鷹野 景子)

発 表(Presentation): Theoretical Study on Adjacent Agostic Interaction in Ruthenium Complexes

今回のシンポジウムは私にとって初めての研究発表の機会でした。今回私がこのシンポジウムに参加したいと思った理由は2つあります。1つ目は、自身の研究内容を口頭発表とポスター発表という2つの方法で発信する機会が用意されていたからです。2つ目は、英語で研究発表をすることは今まで経験したことがなかったため挑戦したいと思ったからです。ポスターを作成することや英語で発表の原稿を考えることは初めてで苦労することもありましたが、最終的にはこれらの目的を果たすことができ、参加することができたことを光榮に思っています。



シンポジウムのために2ヶ月間受講したプレゼンテーション法研究の講義は、発表準備のために大変勉強になりました。アカデミックな英語で文章を書くことや、発表用のスライドに英語を書くときは文章を書くときとは異なる英語表現を用いることなど、今まで英語を使っていた中で配慮していなかったことが多かったことに気付くことができました。また、専門外の聴衆にもわかりやすい表現を用いることの大切さと難しさを感じました。誰がきいてもわかりやすい発表にするために導入部分を詳しくしたり、簡略化した図を有効的に用いたりといった普段の研究発表ではあまり配慮していなかった部分に工夫をこらすことは想像していたよりも難しく感じました。加えて、発表に対する質疑応答の練習ができたことも勉強になりました。はじめは自分が疑問に思ったことがあっても適当な表現が思い浮かばないために発言することができずにいることもありましたが、数回発表をきくたびにどう伝えたら伝わるのか考える習慣を自然と身につけられるようになったと思います。この講義で学んだことは今回のシンポジウムに限らず、これからの研究生活において必ず生きることと思います。

シンポジウム1日目は先生方のレクチャーと学生間の交流会がありました。先生方の英語でのレクチャーを受講させていただき、私もいつか先生方のように流暢な英語で研究発表をすることができるようになりたいと感じました。交流会では、梨花女子大生が積極的に優しく話しかけてくれたおかげで、楽しい時間を過ごすことができました。少しの時間ではありましたが、お互いの研究の話や大学の話、各国の文化の話などをきき合うことができました。話したいことは多くありましたが、なかなかすぐに言葉が思い浮かばず悔しい思いをし、さらに熱心に英語を勉強しようという思いが強まりました。同年代の同じアジア圏の大学生であるのにここまで英語力に差があったということにショックを受けました。私たちは日常的に英語を使う機会があまりないため、伝えたいことを表す単語がすぐに出でこないのだろうと痛感しました。

2日目の口頭発表会では、私にとって初めての英語での研究発表であったため緊張しましたが、準備した成果を出すことができました。しかし、反省点も2つ残りました。1つ目は、発表に対する質問にスムーズに回答することができなかったことです。2つ目は、話している途中で聴衆が理解できていないように感じても即興でフォローを加えることができなかったことです。いずれも英語で話すことに慣れていないことと、語彙力不足が原因にあったと思います。またこのような機会があったときにはなおざりにせず、伝えようとする努力をしようと思います。発表会では、梨花女子大生だけでなく日本女子大生にも刺激を受けました。化学のセッションであったとはいえ、梨花女子大生や日本女子大生の研究内容は普段お茶大では見かけることがないような分野の研究であったため興味深かったです。このセッションでは先生方からだけでなく、学生からも多く質問が出ていて闊達な議論が行われて

いました。私はあまり多くは発言できませんでしたが、他の学生が積極的に質問している姿勢に刺激を受けました。ためらわずに自ら進んで発言できるように英語力に自信をつけていきたいと思いました。

3日目のポスター発表では、2日目の口頭発表をきくことができなかった他分野の発表者に話をきくことができたことが印象に残りました。前日の口頭発表であまり発言できなかった反省をいかして、積極的に梨花女子大生に話を聞きに行き、拙いながら英語でディスカッションをするよう心がけました。研究内容だけでなく大学生活の様子や研究のスタイルについても話をきくことができました。最終日の最後の機会でもっとも英語を使ってコミュニケーションをとることができ、達成感を感じました。

3日間を通して、韓国の学生の優秀さに感心しました。大学の授業が英語であることもあるようでしたが、母国語のようにすらすらと英語を話している姿に刺激を受けました。私自身はこの2ヶ月間を通じて英語力を高めることができたと感じていますが、世界で通用するためにはまだまだ努力する必要があると痛感しました。これからは英語で発表したり外国人の友人を作ることができる機会があつたら積極的に参加したり、論文執筆に挑戦したりして、さらに英語を日常的に使っていくようにしたいと思います。また、研究発表をすることや研究内容についてディスカッションをすることも今まであまり経験がなく今回苦労したため、これからできる限り挑戦していきたいと思います。

最後に、本シンポジウムに参加するにあたり、お茶の水女子大学の先生方をはじめ多くの方々のご尽力、ご協力を賜りました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、韓国で温かく迎えてくださった、梨花女子大学の先生方・学生の皆様にも、心より感謝申し上げます。有難うございました。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 田端 千夏

所属(Affiliation): ライフサイエンス専攻生命科学コース(指導教員(supervisor): 小林哲幸)

発表(Presentation): 躁うつ病治療薬標的候補 IMPA1 機能欠損マウスの脳のリン脂質解析
(Lipid analysis of brain tissues in a mouse model for cellular inositol depletion)

この日韓3女子大学交流合同シンポジウム(お茶の水女子大学、日本女子大学、梨花女子大学)は、学生に対して英語での口頭発表やポスター発表を行うことを参加の条件としているため、英語力やプレゼンテーション能力の向上に結びつくのではないかと思います。以前より参加してみたいと考えていた。そして、今回参加がかない、非常に嬉しく思っている。



シンポジウムが開催された梨花女子大学は、今回初めて訪れたが、非常に大きな女子大学で大変驚いた。キャンパスは端から端まで歩くのも一苦労なほど広く、校舎も西洋を思わせる歴史的な建物から非常に近代的でおしゃれな建物、博物館まであり、カフェや食堂、ショップなども充実していた。日本にはなかなかない大学の形態であり、大変興味深かった。

今回のシンポジウムの中心である発表について、まとめてみたいと思う。先程も記載させていただいたとおり、今回のシンポジウムでは、15分程度の口頭発表とポスター発表を行った。私事ではあるが、英語での口頭発表は初めてで、かつもともと英語が得意な方ではないため、うまく発表できるのか、最初は大変不安に感じていた。およそ15分間で研究内容を聴衆に分かりやすく伝えるというのは、スライド作りや時間配分など日本語でも難しい点が多々あるため、英語でそんなことができるのだろうかという思いもあった。しかしながら、その不安を払拭するように、担当の由良敬先生による「プレゼンテーション法研究」という講義では、プレゼンテーションの基礎から教えていただいたため、無事に口頭発表を終えることができた。具体的には、分かりやすいスライド作り、英語の発音方法、プレゼンテーションの構成、発表のテクニックなど、今回のシンポジウムだけではなく、今後様々な発表の機会に役立つことを学ぶことができた。講義内では、数度の発表練習を行ったが、自分では気づかないような細かい発音や文法に対するアドバイスもいただき、自分の英語力の低さに気づくとともに、徐々に改善していくことを実感することができた。今回のプレゼンテーションの中で最も難しかったことは、科学英語の発音である。普段用いているカタカナ単語の発音はドイツ語由来であることが多いため、英語発音に慣れることに大変苦労した。また、アクセントの位置、二重母音の発音なども難しく、何度も指摘していただいた。今後は、英語での口頭発表を行う時はもちろん、日常の研究生活の中でも科学英語の発音を間違えることのないよう意識していきたいと思う。

口頭発表の当日についてであるが、やはり緊張してしまい、練習の時より早口になってしまったことが反省点である。分かりやすく伝えるというのは本当に難しいことを実感したが、練習すればするほど改善することにも気づくことができたため、本当に充実した経験をすることができた。

私の研究テーマに関してであるが、上記にもあるとおり、「躁うつ病治療薬標的候補 IMPA1 機能欠損マウスの脳のリン脂質解析」について発表させていただいた。梨花女子大学には、お茶の水女子大学にはない薬学部があり、その薬学部の先生方に発表を聞いていただき、多くのアドバイスまでしていただけたのは大変良かった。いただいたアドバイスは、今後の研究に存分に活かしていきたいと思う。また、今回私が明らかにしようとしている、躁うつ病の治療薬「リチウム塩」の作用メカニズムに関して、多くの先生方から「大変興味ある。今後の研究結果を楽しみしている。」とのコメントをいただいたため、今後の研究意義を改め

て実感することができた。この研究内容を発表する際、大変苦勞したのは、やはり疾患名などの専門用語の発音と説明の仕方である。精神医学を専門としない聴衆に理解してもらえよう工夫することが大変難しかった。

今回のシンポジウムでは、日本と韓国の学生による発表と先生方によるレクチャーが行なわれた。分野は理系に限られるが、物理や情報、化学、生物など多岐にわたり、研究内容はそれぞれ専門性に特化しているため、理解に難しい分野もあったことが正直なところである。しかしながら、ポスター発表などでは個別に意見交換をすることもでき、基礎から解説していただいたため、新しい分野への知見を広げることができた。韓国の学生による発表はどれもレベルが高く、研究データ量が豊富で、刺激を受けた。専門的な内容の会話や質疑応答もスムーズに英語でこなしている様子も目の当たりにし、私自身もより一層英語力を向上させたいと改めて実感することができた。現在の研究生活ではあまりにも英語を使う機会が少なすぎるため、今後は英語を使う頻度を増やし、再び英語で口頭発表をする機会を得られるよう励みたいと思う。

発表以外の経験も、ここでまとめてみたいと思う。私は、韓国を訪れるのは去年の12月に引き続き、今回が二回目であった。そのため、韓国の街並みは見慣れており、入国した際はどこか懐かしい気持ちもしたが、3日間の滞在で新しい経験もすることができた。特に、最終日の自由行動では、これまで訪れたことのなかった仁寺洞という場所に行くことができた。このエリアは、韓国雑貨やインテリア、デザイン、食文化に関するショップが集まっており、韓国の文化や芸術に触れることができた。韓国の伝統茶を扱う茶屋に立ち寄ったが、日本では味わうことができない独特なお茶をいただくことができ、韓国の文化を堪能することが出来たことも心に残っている。

また、私はもともと韓国文化(ドラマや音楽など)にも興味があり、韓国語も趣味程度ではあるが、勉強してきた経緯がある。そのため、今回のシンポジウム中、お店の看板や駅構内の標示などが多少理解できたり、レストランやショップ等での会話の中で韓国語を交えることができた時は、大変うれしく、英語以外の言語を学ぶことの楽しさも実感することができた。地理的に最も近い韓国という国の言葉、韓国語を今後も学び続け、コミュニケーションがよりスムーズにとれるようにしたいと改めて思った。

今回のシンポジウムは、総じて私にとって参加してよかったと思える内容であった。英語を用いて、他国の学生と研究内容に関して意見交換ができる貴重な機会を提供してくださった関係者の皆様には心より感謝の言葉を申し上げたい。シンポジウムを通して、英語力、プレゼンテーション能力ともにまだまだ未熟であることが分かったため、今後も学び続け、自分の研究を多くの人に理解してもらえよう、発信力を身につけるとともに、研究生活もより一層充実させていきたいと思う。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 青木 郁子

所 属(Affiliation): 理学部生物学科 (指導教員(supervisor): 近藤 るみ)

発 表(Presentation): Identifying the Genetic Regions Underlying an Olfactory Behavior to Specific Food in *Drosophila sechellia*

今回、私が「日韓3女子大交流合同シンポジウム」への参加を決意したのは、研究発表を行う機会を得たいと思ったからでした。私は現在学部4年生です。まだ研究を開始してからの期間が短いため、学会での発表には至りませんでした。今年度での卒業を控え、進学ではなく就職の進路を決めていた私にとって、アカデミックな研究発表の機会を得ることは憧れであり、学生のうちに実現させたい経験でした。この日韓合同シンポジウムは正式な学会とは異なりますが、公用語が英語ということもあり国際学会を目指す学生が多く参加していてたくさんの刺激を受ける貴重な機会となりました。



本シンポジウムでは、参加者に対して事前授業が用意され、本番を意識した形式での発表練習が行われました。授業で発表しフィードバックをもらう中で、私は英語を怖がらずに話す度胸が少しついたように思います。スムーズに高度に伝えられなくても、相手の理解力に頼って伝えようとするれば学べるのが沢山あると感じました。しかし同時に、平易な言葉でも“正確”に伝えることはとても大切なことだと学びました。“正確に”という点で私が強く反省したのは、自身の発音・アクセントの不正確さです。これまでの勉強の仕方が正しい発音とアクセントを意識せず、なんとなく頭の中で読むだけだったため、実際に話そうとすると曖昧な英語を話していることに気づきました。どんな簡単な単語も正確に発音が出来なければ伝えることは困難です。言葉の発音・アクセントを重視した勉強も必要だと考えるようになりました。また、発表のテクニックとして、自身の研究を他分野の人にも広く理解してもらうためには、多くの工夫がいることも実感しました。具体的には、図の色使いやアニメーションを効果的に用いることで情報が整理され、理解が容易になります。また言葉の選び方や補足の仕方、提供する情報の量など、“外してはいけないこと”と“加えなくていいこと”をよく考えることも、分かりやすい発表には欠かせないと思いました。

シンポジウム会場であった韓国の梨花女子大学校はとにかく敷地が広く、会場の建物までの道のりが遠かったのが印象的です。大学構内にある建物はどれも重厚感溢れ、モダンなガラス張りの建物などもあり、梨花女子大の伝統と格式を感じられるものでした。

むかえた研究発表本番は、課題の残るものとなりました。課題は大きく2つあります。まず自身の発表に関して、聴衆と目を合わせ、反応を見ながら発表することができなかったことです。自分の発表に自信がないからこそ、聴衆を置いていかないようこの点だけは意識していただけに、とても悔しい反省となってしまいました。ゆっくりと反応を見ることができなかったため、発表中の問題点に気づく間もなく終えてしまいました。2つ目は議論に積極的に参加できなかったことです。これは自身の質疑応答の際にも感じたことですが、基本的な英語力と知識が足りなかったための反省です。どちらも足りないから理解が中途半端になり、発言することができませんでした。一方、梨花女子大の学生さんは英語を話すことに慣れているように感じられ、発表の際もそれ以外の場でも、とても自然にスムーズに受け答えをしていたのが印象的でした。

このシンポジウムへの参加を通しての反省点は以上の通りですが、良かったと思える点も沢山ありました。まず、口頭発表やポスターセッションで、拙いながらも他分野の研究をする人とディスカッションをすることで、これまで自分では気にしたことのない意外なところに疑問や興味を抱く人がいて、見落としてきた問題に気づくことができました。また、梨花女子大の先生で私たちに英語ではなく韓国語で話しかける先生がいたのですが、なかなか話が通じなくても、何とかコミュニケーションをとろうと笑顔で一生懸命話しかけてもらえることをとても嬉しく感じました。好意は言葉がなくても伝わるのだなと実感したので、その言葉を話せないからと遠ざけるのではなく、言葉に不安があっても懸命に近づこうとする姿勢を大切にしようと思いました。

自身の未熟さに向き合い、これから学ぶべきことが沢山あることに改めて気づいた今回のシンポジウムでしたが、学生生活の最後にこのような機会をいただけて本当に良かったと思います。卒業までの残りの3ヶ月間、また卒業後も、色々な事柄に興味を持って沢山の知識を蓄え、国を超えて多くの人と関わっていきたいと思いました。

最後になりますが、今回のシンポジウムにあたりご指導くださった教授、職員の皆様、また現地でお世話になりました梨花女子大学校の教授、学生の方々に心より感謝致します。どうもありがとうございました。

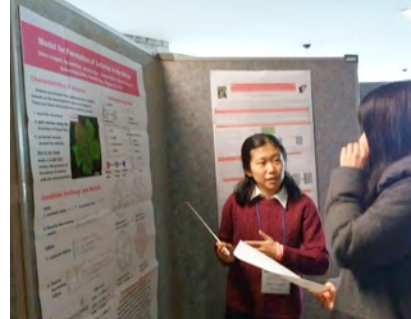
第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 稲垣 志帆

所 属(Affiliation): 理学部情報科学科 (指導教員(supervisor): 郡 宏)

発 表(Presentation): Model for Formation of Arteries in the Retina

今回のプロジェクトを通して、私は2つの新しい貴重な経験をしました。1つ目は英語でプレゼンテーションをすること、2つ目は分野外の人にもわかりやすく自分の研究内容を紹介することです。毎週1回90分、このプロジェクトに向けての発表練習を2か月間続けることで、これらのプレゼンテーションスキルは大きく向上したと考えています。発表練習では他の参加者の発表練習を聞くことで、発表スキルだけでなく、聞く態度も学びました。



1つ目に関して最も難しかったのは、どのような英語を用いれば相手に伝わりやすいかを考えることです。できる限り英文を簡潔に、そして多義語を用いる際には意図する意味と異なる意味で相手に伝わらないように配慮しました。また、緊張している中ではありましたが、話すスピードが速すぎて相手に伝わらないことがないように心がけました。さらに聞き手との距離が短いポスター発表では、相手の表情を見て、伝わっていないようであれば、相手に伝わるまで様々な同義の英語に言い換えを行いました。他にも、専門用語の適切な英訳が見つからない、慣れない英単語の発音などの苦労はありましたが、周りの方々のサポートにより、発表前に克服することができました。

2つ目に関して最も難しかったのは、どの程度まで相手に前提事項を伝えるかということです。同分野間で研究発表を行う際には省いて良い説明であっても、省くと他分野の方には伝わらない可能性があります。一方で、前提事項の説明に時間をかけると自分の研究内容を紹介する時間が短くなってしまいます。特に口頭発表では13分という限られた時間の中で、いかに相手に理解していただける説明ができるか、自分の研究内容の全体像を紹介できるかの調整が難しかったです。発表練習の段階で何度も分野外の複数の方にプレゼンテーションを聞いていただくことで、どの程度の前提知識が必要なのかを体験することができました。また、同じ内容を話してもプレゼンテーションの構成によって伝わりやすさは大きく変わるので、直前まで構成の変更を行い、よりわかりやすい構成になるように努めました。

学部4年生での発表であったこともあり、発表に必要な研究成果を集めながら発表資料を作っていたため、直前まで資料の変更を加えました。そのため、説明内容が日に日に変わってしまう状態でしたが、口頭発表やポスター発表の時にできるだけ聞いてくださっている方々と顔を合わせられるように、スクリプトを見ずに流暢に話せるように何度も練習を重ねました。そのため、口頭発表では緊張してしまい一部スクリプトを見てしまいましたが、ポスター発表の時は議論に集中することができました。さらに聞いてくださる方への配慮として、ポスター発表では持ち運びが容易な小さなホワイトボードに書いて説明をしたり、メモを取らなくても発表内容が保存できるようにA4用紙1枚両面で収まる程度のアブストラクトを印刷した紙を渡したり、以前に来てくださった方と議論になった内容を付箋に書いて貼ったりしました。これらの事前準備の必要な工夫により、限られた時間の中でより一層有意義な議論が進められたと考えています。

今回、私の発表内容は「物理法則を用いて、生物の発生過程における動脈の形成を数理モデル化し、シミュレーションをする」という分野横断的なものであり、どの分野を専門としている方から見ても、発表全体のうち少なくとも部分的には他分野に属するような研究内容で

あったにも関わらず、口頭発表における質疑応答時間や口頭発表後の休憩時間、ポスター発表中に多彩な分野の方々から熱心な質問やアドバイスをいただきました。いずれも有意義なものであり、今後の研究の参考にしたいと考えます。

海外に行くことが今回初めての体験なので、戸惑うこともありましたが、梨花女子大学の学生や街中の方々が温かく接してくださったおかげで安心して過ごすことができました。また、初日の交流イベントでは、梨花女子大学校や日本女子大学の学生と親睦を深めることができました。お互いに英語が伝わらないこともありましたが、身振り手振りも用いることで意思の疎通を図ることができました。たったの 3 日間という短い期間ではありましたが、様々な話題で話すことができ、とても有意義であったと思います。今回仲良くなった方達と、今後とも機会があれば関係を保ちたいです。

1 つ残念だったことは、ポスター発表の時間が 2 時間と短かったことです。私の研究に多くの方が興味を持ってくださったことは大変嬉しかったです。一方で、聞きに来てくださる方が多かったため、他の人のポスター発表を聞きに行く時間があまりとれませんでした。また、来てくださった方も、じっくり話を聞きたい気持ちと他の発表も見するために焦る気持ちで揺れている様子が見られました。そのため、もっと多くの人とじっくり議論する時間が欲しかったです。また、事前に渡されたアブストラクトでは研究内容の詳細がわからないため、例えば口頭発表後にポスターを見て回り、次の日に行われるポスター発表の時間中にどの発表を重点的に聞くか決める時間などがあると良いと感じました。

今回の日韓 3 女子大学交流シンポジウムに参加して学ぶことができた様々なことは、今後参加するであろう国際会議でも十分に生かせるものだと思います。このような機会を設けてくださった、梨花女子大学校の方々、日本女子大の先生、由良先生に深謝いたします。

今回から最優秀発表賞が設置されました。発表練習をする際に賞は一つの励みになると思います。光栄なことに、初回となる今回この賞をいただくことができました。指導教員の郡先生、研究室の先輩方、発表練習に付き合ってください先輩方や同期の皆様はこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。この名誉ある賞の名に恥じぬよう、今後とも研究に邁進し、積極的な研究発表、及び研究の重要性を示す態度を心がけたいと思います。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 中川 真理子

所 属(Affiliation): 理学部情報科学科 (指導教員(supervisor): 由良 敬)

発 表(Presentation): Interwound Structures of Protein-Protein Interfaces

— Database Development and Analysis of the Features —

私は国外で、英語で研究発表を行ってみたいという思いから本シンポジウムへの参加を希望し、その機会に恵まれました。そして、この経験はとても貴重なものとなりました。

学部4年生の私がシンポジウムで発表するのは、研究と発表の準備を同時に進行させなければならなかったため、とても大変でした。そのため口頭発表に向けての準備はハラハラしたものでした。日本出国前夜にやっとでスライドをほぼ完成させ、羽田空港や飛行機の中では話す内容のブレイクストーミングをしました。韓国到着後の一連のイベントが終わったあと、再び発表の準備にとりかかることができたのは夜8時過ぎでした。スライドの微修正やプレゼンテーションの練習を深夜にかけて行いました。休憩を挟みながら作業をしたとはいえ、午前2時半まで目前に迫った発表への不安を抱えながら準備を進めるのは苦しかったです。翌朝も何度も頭のなかで話す内容を反芻しました。朝ごはんが喉を通らないほどの緊張で、押し潰されそうでした。しかし、先輩や同期の方々が直前まで応援してくださったので、セッションがはじまるとだんだん落ち着いてきました。そして迎えた自分の発表は、ある程度リラックスして臨むことができました。さらに、話し始めると、梨花女子大学の先生方がとても優しく微笑みながら聞いてくださるのが見えて、一気に緊張がほぐれました。苦手意識をもっていた質疑応答は相変わらず上手くこなせませんでしたが、優しい方々に囲まれていたお陰で今の時点での力は出し切ることが出来ました。本シンポジウムでの口頭発表を経験して、最後まで諦めないことの大切さを改めて実感し、周りの人に支えられているからこそ乗り越えられることがあるのだと知りました。指導教員の由良先生、研究室のみなさま、一緒に参加した先輩方、同期のみなさまには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

由良先生のプレゼンテーションの授業は素晴らしいものでした。英語の発音、文法の誤りの指摘から研究内容の効果的な説明の仕方まで具体的かつ的確にアドバイスできる方は、日本中どこを探しても由良先生しかいないと思います。授業が進むにつれて、みんなのスライドがどんどん変化していき、それぞれの発表がより良いものになっていく様子は感動的で、みんなで丸となって頑張っている気持ちになりました。本番の約一週間前に厳かな雰囲気で行われたリハーサルも効果的でした。私の場合はリハーサルのあと、発表内容を大幅に変更して本番に臨むことになったのですが、それでも緊張した状態で、人前で話をしたという経験は自信につながりました。研究内容のバックグラウンドを共有していない観客に向けての発表の準備は想像以上に大変なものでした。限られた時間の中でもきちんと時間をかけて伝えるべき事柄と、そうではない事柄の線引きがとても難しかったです。しかし、リハーサル後に由良先生から何を説明するべきかのアドバイスをいただけたお陰で、本番では分かりやすい発表になったのではないかと思います。

また、シンポジウムで先生方のご講演を聴く機会があったのは嬉しかったです。由良先生のご講演はまるでTED Talk のようでした。一般の人が聞いても分かるお話ができるのは、それだけ深く理解なさっているからこそ成せる技だと改めて感じ、憧れました。梨花女子大学の Jae Youn Ahn 先生のご講演は数式を眺めるのが好きな私にとってはとても楽しいものでした。スライドに数式がたくさん書いてあっても、ひとつひとつ丁寧に説明すれば観客には伝わるものなのだということが分かって新鮮でした。しかし残念なことに私の勉強不足で途中から全くついていくことができません

でした。そしてもっと残念なことに質問する勇気ができませんでした。質問して答えていただいても理解できる気がしなかったため、縮こまってしまいました。今すごく後悔しているので、今後は分からないことはすぐに聞こうと思います。

梨花女子大学の学生さんたちは学術的な発表の場に慣れているように見受けられました。口頭発表だけでなく、質疑応答、ポスター発表も上手でした。そんな学生さんの様子は私にとって大きな刺激となりました。もっと梨花女子大学の学生さんといろいろなお話をしたかったのですが、残念ながら今回のシンポジウムでは交流の時間や機会はそれほどありませんでした。私が興味をもつバイオインフォマティクスの分野の学生さんが多く参加していて、とても嬉しかっただけに、友人をつくることができなかったことが心残りです。

韓国は地理的にも文化的にも日本と近く、away ではなく、home な感覚で過ごすことができました。街の方々もとても優しく、困っていると助けてくれる方ばかりでした。右の写真は、仁寺洞通りのお店の看板犬と撮ったものです。



今回からベスト発表賞が導入され、大変光栄なことにこの賞をいただくことができました。これは、指導教員の由良先生、研究室のみなさま、多くの友人、家族、一緒に参加した方々に支えられたお陰で成し遂げられたことです。ここで改めて感謝の意を表したいと思います。